

禁断の果実

島田裕巳

舞台の上に、三つの椅子がある。それに、父親、母親、娘の三人が腰かけている。

三人とも沈鬱な表情で、うつむき、しばらく沈黙している。母親が、父親の機嫌をうかがいながら、問いかける。

母 どうすれば？

父親は、母親の問いに対して、露骨な不快感を示す。

父 決まっているじゃないか。

母 はあ。

母親は、当惑した表情を浮かべている。

父 他にどうしろというんだ。

母 はあ。

父 事態がこうなってしまった以上、しかたあるまい。

母 でも、それでは真理子が……

父 真理子？

母 いくらなんでも、それではかわいそうですわ。

父 かわいそう？

母 だって、あなたがお考えになっているのは、お弟子さんですし

……

父 馬鹿な。お前は……

母 すみません。私、あなたが決まっているなんておっしゃるもの

ですから、てっきり……

父 私だって、真理子の親だ。

母 それだったら、わかりました。手ははやくうったほうが……

父 手？

母 あなたは、青木さんにきちんと……

父 なにをはやとちりしている。そんなことができるか。私の立場も……

母 大丈夫ですわ。秘密がもれるようなことはありませんから。

父 そうじゃない。立場といっても、世間がどうのこうのといふことじゃない。お前にはわからんかもしれんが……

母 その点は十分に理解しているつもりです。こういうケースは許していただけるんでは……

父 それは人間が決めることでは……

母 だったら……

父 お前はなにもわかっておらん。

父 父親は、怒り出す。母親は、急な夫の変化についていけず、うろたえる。

父 真理子の気持ちだって無視するわけにはいかん。真理子も大人だ。いくら、むしろが真理子の親だからといって……

母 それは、そうですけれど。

父 父親は、椅子から立ち上がり、娘の座っている椅子の背に手

をおき、やさしそうに語りかける。

父 どうなんだ、真理子。

娘は拳をかたく握りしめたまま、顔も上げず、黙っている。

父 お前はどうぞすればいいと考えてるんだ。お母さんの言ったことなど気にしなくていい。お前の思っていることを、そのまま言うてくれればいいんだ。お父さんたちは、お前がよいように最大限の努力はするから。

娘は握った拳をかすかに動かしているが、依然として口を開こうとはしない。

父 真理子、言ってくれなければ、お父さんたちにもわからないじゃないか。

娘はなおも黙っている。父親はあきたような表情で自分の椅子に戻る。

父 (母親に向かって) お前に似ているよ、真理子は。

母 なにがですか。

父 強情なところがだよ。

母 そんな。

父 そうさ。困っているときでも、他の人間に頼ろうとしない。夫だろうと、父親だろうと同じだ。自分が、世界の中心だと思っ

母 それは、あなたが勝手にそう思っただけで……

父 もちろん、青木のやったことは許せん。だが、私には、今でも信じられん。あいつがそんなことをするのは……

母 まさか、あなたは真理子が……

父 馬鹿な。

父親は立ち上がり、周囲を歩きまわる。

父 ただ、事態が不可解なだけだ。私はこれまで青木を信じてきた。期待もしてきた。それに、彼には絶好のチャンスがめぐってきたところだ。なのに……、私には理由がわからん。

母 だって、青木さんも認めてらっしゃるじゃないですか。魔がさしたってことじゃ……、まだお若いから……

父 今度の青木の作品はいい。私がこれまで青木に求めてきたものを、ようやく小説として描くことに成功している。しかも、書き

下ろしの長編だ。文壇はどうか知らないが、社会的にも評価されるにちがいない。出版のめどもついた。編集者の田村君などは、「先生のあとを継がれるのは、やはり青木さんですね」とさえ言ってくれている。青木の前には、作家としての輝かしい未来が待っている。

いや、待っていたと言うべきだろう。なのに、あいつはそのチャンスを棒にふってしまった。これほどの馬鹿だとは思わなかった。世間になんか知られたら、大きなスキャンダルになる。あいつの作家としての未来など簡単に吹き飛んでしまう。

私には惜しいんだ。あいつの才能が。

母 まさか、あなた、青木さんを許そうとお考えなんでは。

父 馬鹿な。許せるはずがない。

母 だったら……

父親は、椅子に座り、頭を抱える。

母親は、なにも言えない。

娘 あの人の今度の作品って、『ことばなき懺悔』のこと？

父親と母親は、驚いたようにおたがいを見つめる。娘は、父親をじっと見ている。

父 ああ。

娘 私、読みました。いつもそうなんです。あの人、お父さまに見せる前に、必ず私のところに書いたばかりの作品をもってきて、読んでくれて言うんです。ですから、私、あの人の作品はこれまで全部読みました。お父さまが読んでいない作品も読んでいます。お父さまはご存じないかもしれませんが……

父 それはどういふことだ。私は、青木の書いたものなら全部目を通しているはずだが……

娘 なんであの人、最初に私のところへもってくるのかおわかりになります、お父さま。

父 さあ。前々からお前に気があったからじゃないのか。

娘 自信がないんですよ、あの人。

父 自信？

娘 そのくせ、プライドだけは妙に高くて。もっとも、それがなければ、小説家などになれないのかもしれないかもしれませんけれど。

父親は、かすかに不機嫌そうな表情を見せる。

娘 あの人、私に感想を求めるんです。でも、内容についてではないの。お父さまに見せていいものかどうか。あの人が聞きたいのはそれだけなんです。

あの人、お父さまに評価してもらえなければ、自分に小説家としての道は開けないと思っっているんです。それに、お父さまを尊敬しているし。だから、お父さまを落胆させるような作品を見せたくなかったんじゃないかしら。

でも、あの人、自分ではどの作品がお父さまを喜ばせるのか、落胆させるのか、わからなかったみたい。それで私のところにもってきて、私がOKを出したもののだけ、お父さまに見せていたんです。

父親は、いっそう不機嫌そうな表情を見せる。

娘 ですから、私がOKを出さなかったものもあるんです。

父 たとえば。

娘 『聖女たちの末裔』だったかしら。あの人、ミッションスクールに関心をもったみたいだったんです。

父 ミッション？

娘 私から学校のこといろいろと聞き出して、ミッションに通っていた女の子たちが、社会に出ていったとき、どういう人生をたどるのか、それを追った作品だったんです。

父 青木がそんな作品を書いたのか。

娘 あの人、本当は、自分の内面を探っていくようなものよりも、

ルポルターージュっていいのか、ノンフィクションの方がむいていたい。

『聖女たちの末裔』って、結構、おもしろかったのよ。お父さまにも読んでいただき良かったわ。

父 だったらなぜ、お前はOKを出さなかった。

娘は笑い出す。戸惑う父親。

母 真理子さん、なんですか。お父さまに失礼じゃない。

娘 ごめんなさい。もし、お父さまが『聖女たちの末裔』をお読みになったら、どんな顔をなさるだろうかって考えたものですから。おかしくて。

登場人物は、どれも私のお友達がモデルになっているんです。

一人は信者のご家庭ではなくて、お母さまがミッションのご出身の方なの。でも、香代ちゃん……その方、香代子さんで言うんですけれど、お父さまがお仕事にご熱心で、家庭をあまり顧みない方だったらしく、外に別の女性もいたらしいんです。だから、香代ちゃん、本当はいろいろと心の底にたまっていたみたい。でも、学校にいるあいだは、意地張っていたのかしら、まじめな優等生で通していたけれども、卒業して、共学の大学に通うようになってからすっかり人が変わってしまって、お化粧は派手になるし、

男の人にはだらしなくなるし、最後は、なんかほとんどやくざみたい男に騙されて、売春みたいなことさせられて、おまけに悪い病気までうつされて、坂道を転げるように落ちていってしまったんです。

もう一人の登場人物の千代ちゃんは……、もちろん、お母さまもよくご存じの千代江さんのことですから、千代ちゃんは、ご両親が学校の先生だからかしら、ものすごく真面目で、学校時代はシスターの先生方のお気に入り。なにかあると、先生方から真っ先にご指名があるような、生徒の鏡みたいな人だったの。シスターにならないかってお誘いもあったみたい。私たちも、千代ちゃん、きっと将来はシスターになって、学校に先生として戻ってくるんじゃないかって噂していたくらい。

でも、私たちも本当は何があったのか知らないんですけれども、大学で、その神父さまかシスターの方ともめて、一年間休学なさったんです。復学したあとは、授業に出て単位はちゃんととったんですけれど、勉強には少しも熱が入っていませんでした。それに、先生になる気がまったくなくなりました。とうとう教育実習にも行かず、卒業してからは塾の講師なんかしてたの。ご家庭の方でも、いろいろと大変だったみたい。

だから、なんかわかるような気もするのよね、千代ちゃんが、あの宗教にひかれた気持ちも。ご両親は、とかく問題がある宗教

だからって強硬に反対されたけど、千代ちゃん、自分の意志を押し通して、結局、同じ信者の男性と結婚してしまったの。ご両親は、教祖が勝手に指名した相手となって許せないと怒っていらっしやっただけれど、千代ちゃん自身は最高の相手だって言ってたわ。もう、お子さんもういらっしやるの。お孫さんができると、さすがにご両親のお怒りも鎮まったみたい。

この二人を中心に物語が展開していくのが、『聖女たちの末裔』だったってわけ。

父 題材としては悪くないと思うが……

娘 そうでしょ。ミッシェンの内側って、結構、読者の好奇心をそそるもの。

父 曾野綾子の『不在の部屋』のミッシェン版というわけか。

娘 そうね。あの人も、少しは『不在の部屋』を意識したみたい。

でも、『不在の部屋』が信者の方々に、どう受け取られたかまでは考えなかった。

父 裏切りというわけか。

娘 そうよ。第二ヴァチカン公会議以降、カトリックの世界が大きく変わったのは事実だけれども、なにもそれを暴露小説みたいにスキャンダラスに書くことないって、曾野さんも、ずいぶん非難されたんじゃないかしら。

『聖女たちの末裔』にそんな評判が立ったら、あの人だけじゃ

ない、お父さまもずいぶんとお困りになったんじゃない……

娘は、半分意地悪そうで、半分愉快そうな微笑みを浮かべて、父親を見つめる。

父親は、娘にすべてを見透かされているかのように視線を外す。

娘 『ことばなき懺悔』か？

父 あれは、お前の検閲をパスしたってわけか？

娘 もちろんよ。フリーパス。

父 フリーパス？

娘 私、あの人に、お父さまから、絶対褒めていただけれるわよって、太鼓判を押してさしあげたの。なんだか、お父さまの手が入っているんじゃないかって、思えるところもあったくらいだから。

そんなことないわよね？

父 もちろんだ。

娘 だったら、お父さまがモデルなのかしら。

父 モデル？

娘 主人公の設定はちがうけれど、あの人を書いていて、主人公がぶつかった「壁」って、お父さまもぶつかったことがおありになるんじゃないかしら。

父 小説は、人間の普遍的な問題をあつかうものだ。私だけが何かにぶつかっているわけじゃない。

娘 お父さまの言い方は、どうしてそんなにまわりくどいのかしら。それって、私が申し上げたことをお認めになるってことですよ
ね？

父 お前は、どうしても私をモデルだということにしたいのか？

娘 そうかもしれないわね。

父 馬鹿げている。

娘 そうね、馬鹿げているわ。

娘は父親に向かってかすかに微笑むと、昔のことを思い出したかのようにぼんやりとした表情になる。

娘 私、大学の「日本思想史」という授業で、レポートを書かされたことがあったんです。日本の思想史上の人物を一人とりあげて、その思想について論じないさいっていう。

私、本当はお父さまのことをとりあげたかったですけれど、友達があんまりだからって言うんで、しかたなく止めたんです。なにがあんまりだか、わからなかったんですけれども。

それで、いろいろ考えて、最後は、新渡戸稲造をとりあげることにしたんです。なにか、お父さまに似たところがあると思った

から。

父 私が新渡戸と？

娘 ええ。

父親は腕をくんで考えこむ。

娘 私、思想史なんてちゃんと勉強したわけじゃないから、たいたしレポートにはならなかった。たしか、成績はBじゃなかったかしら。

新渡戸っていう人、クリスチャンでしょ、プロテスタントだけ

ど。

父 ああ。

娘 あら、なんていったかしら、もう忘れてる。

父 クェーカー。

娘 そうそう、アメリカでクェーカーになったんだわ。そして、『武士道』とか『修養』とかという本を書いて、東京女子大の創立者にもなった。五千円札になっているくらいだから、偉い人よね。

父 お札になったからといって……

娘 そうよね、にせ札が作りにくいように、髭をはやした人を選ぶなんて話もあるものね。

父 で？

娘 あら、お父さま、私の話に興味がおあり？

父 やぶからばうに、新渡戸の話などは始めるから……

娘 新渡戸って方は、アメリカでクエーカーの信仰にめざめて、日本でもその活動はされたけど、でも、歴史に残っているのは、そのせいじゃなくて、『武士道』とかを書いたせいでしょ。『武士道』ははじめ英語で書かれて、日本の文化を海外に紹介することに貢献した。そうよね？

父 そうだ。

娘 でも、私が関心をもったのは、『修養』って本の方。出たときにはたくさんの方が読んで話だけけど、これって道徳論でしょ。人はこういうふうに生きるべきだとかなんとかいう。

私が不思議だと思ったのは、新渡戸は自分がクエーカーなのに、クエーカーの道徳を説くわけでも、キリスト教の道徳を説くわけでもなかった点なの。イエズスさまの話も神さまの話もしないのよね。

父 イエズスさまだ。

娘 私はイエズスさまの方が好き。子どもの頃からイエズスさままで育ってきているんだから。

そのときは、私、不思議だと思っただけで、なぜそうなのか説明がうまくつかなかった。成績が悪かったのも当たり前よね。

でも、今ならわかる気がするの。

だって、新渡戸って、お父さまみたいにズルイ人だから。

父 新渡戸のことは知らんが、私がズルイと言うのかね。

娘 そうよ。お父さまはズルイわよね、お母さま？

母 ええ。

父 二人して私を馬鹿に……

娘 馬鹿にしているわけじゃないわ。ズルイっていうのは、頭のいい証拠じゃない。

新渡戸は、日本の社会を近代化するためには、自分が信仰しているキリスト教の精神を広める必要があるって考えた。クエーカーは、形ばかりの儀式とか、難しい教義なんて必要ないっていう考えをもっていたから、新渡戸は合理性があるって考えたのかもしれないわね。それに、非暴力主義だし。でも、そのために、日本人をみんなクエーカーにしようとか、キリスト教徒にしようなんて考えなかった。なぜだかわかるかしら、お父さま。

父 さあ。

娘 本当はわかってらっしゃるはずよ。

娘は、父親をうかがうように、じっと見つめる。父親は、その圧力に負けたかのように、視線を外す。

娘 娘がどのくらい勉強したのか、試してみるのもいいかもしれな
いわね。

新渡戸は、札幌農学校の出身だけど……、札幌農学校って、こ
の時代にはエリートに進む、今の東大みたいな学校だったんで
しょ？

父 ああ。

娘 新渡戸は、その札幌農学校で内村鑑三といっしょだった。

父 なるほど。

娘 さすが、お父さま。もうおわかりよね。

父 内村の不敬事件を教訓にしたってわけか。

娘は、拍手をする。父親は照れる。

娘 よくできました。

父 馬鹿な。親をからかうもんじゃない。

娘 キリスト教を布教しようとすれば、それに反対したり、敵対す
る人も出てくる。内村みたいに社会から葬り去られたらたまらな
い。かしこい新渡戸は、そう考えたんじゃないかしら。

それで、信仰は自分個人の問題にとどめて、キリスト教の精神
だけを、キリスト教とわからないように、修養というかたちで広
めようとした。自分の救いってことと、他の人を救うってことを

分けたのよね。

父 なるほど。

娘 でも、それって、神さまの教えに反してることなんじゃないか
しら。「福音を述べ伝えよ」っていうのが神さまの教えでしょ。

父 まあ、そうだが。

娘 ずいぶんと歯切れの悪いお答えね。そこがお父さまらしいって
いえば、そうだけど。

母 真理子、今日のあなたは本当に……

娘 失礼かもしれないけど、これはとても大切なことではないかし
ら。私にとっても、お母さまにとっても。

母親も父親も、ことばが出ない。

娘 お父さま、娘を見直した？

父 ああ。

娘、急に笑い出す。あっけにとられる父親。

娘 ごめんなさい。あんまりおかしかったものですから。

父 なにがだ？

娘 受け売りってわけじゃないけれど、これ本当はあの人の考えた

ことなの。

レポートを書いたときはちがうわよ。私、自分で調べて考えたんだから。でも、なんかのときに急にその話になって、私がどうして新渡戸稲造は、布教に熱心じゃなかったのって聞いたたら、あの人、私がしたみたいないな解説をしてくれたの。

私、なるほどって感心しちゃった。あの人、考えるところは考えてるんだって。

父 ということは、青木は私を新渡戸のような人間だと思っているということか？

娘 それはちがうの。新渡戸とお父さまが似ているって考えたのは私。あの人にも、そんなこと言わなかったわ。言ったら同意してくれただかもしれないけど。

また、笑い出す娘。

娘 (急に真顔になり) どうしてなのかしら、お父さまが、お母さまをカトリックに改宗させようとしなかったのは。

一瞬の間

父 信仰は個人の問題だ。

娘は、笑いをこらえる。

娘 私はどうなるの？

父 お前にだって信仰を強制したおぼえはない。

娘 そうかしら。幼児洗礼は受けなかったかもしれないけど、私、幼稚園からミッシヨンよ。

幼稚園から高校まで、登校したときと下校するときに、毎日必ずお祈りの時間があって、主禱文を唱えさせられた。それって、信者と同じじゃない。

いいえ、信者以上かもしれないわね。お父さまだって毎日お祈りしているとはかぎらないもの。それって、私が選んだわけじゃない。ミッシヨンを選んだのはお父さまよ。

父 『ことばなき懺悔』はどうした？

娘 ごめんなさい。そうだったわね。でも、そういうことなのよ。

父 なにが、そういうことなんだ。

娘 主人公の井口は、新渡戸ほどずるくなれなかったってことでしょ。

父 どうしてお前は、なんでもずるいということ基準に判断しようとするんだ？

娘 なぜかしら？

娘は、父親の表情をうかがう。父親は顔をそむける。

父 社会が問題なんだ。日本人にとって重要なのは、要するに世間だ。世間を気にしながら、自分を殺して生きなければならぬ。

そんな社会で、個人が確立されるはずはない。個人が確立されなければ、確固とした信仰などもてるはずはない。

娘 だから、井口は晴美を見殺しにしてしまうわけ？

父 見殺し？

娘 晴美は井口を愛していたのよ。だから、あんなことまでしたんじゃない。なのに、井口は、結局自分を守るために、晴美を救おうとしなかった。それって、結局、井口は世間体を気にしただけじゃないの。

父 井口は十分に苦しんでいるじゃないか。

娘 自分が苦しめばそれでいいの？ 苦しむことよりも、晴美を救ってあげることの方が大切なんじゃないの。

父 お前には、信仰をもつ人間の苦しみなんてわからんのだ。

その瞬間、電話のベルが鳴る。

母親が立って、受話器をとる。

母 はい、吉成でございますが。……はあ……はい……ちょっとお

待ちください。

お父さま、青木さんですけれど。

父 青木？ いまさらなんの用だ。

母 さあ。

父 用件を聞け、用件を。

母親、ししぶとといった感じでふたたび受話器をとる。

母 失礼ですが、どういったご用件で？……はあ……ええ……ま

あ……ちょっとお待ちください。

直接でなければとおっしゃっていますが……

仕方がないといった感じだが、立ち上がると少し足早に電話口。

父 もしもし、私だ……そんなことはわかって……それで……

だからなんだ……なに……それはそうだが……そんなことになん
の意味がある……それでは、私が困る……田村君にどう説明すれ
ばいいんだ……私も認め、田村君も評価した作品だ。それをいま
さら出版しないでくれと言うのは……理由がない……妙に勘ぐら
れたら、私が迷惑だ……予定通り進めるしかない……わかったか

……田村君は、次もお願いしたいなどと言っていたくらいだ……
とにかく、それしかない。わかったな……じゃあ……

父親が乱暴に電話を切ると、母親がげんそうな表情で夫を
見つめる。

父 なんだ？

母 そうなんですか？

父 なにがだ？

母 今の電話だと、青木さんの作品を……

父 出版しちゃういけないのか？

母 ……

父 私の方から、出版しないでくれとも言えまい。だからといって、
青木に辞退させれば、余計に話がややこしくなる。それでは、私
も困るし、真理子も困ることになるかもしれん。それ以外に、ど
うしろというんだ。

そんなこともわからんのか。

父親は不機嫌そうに椅子に腰かける。

娘 お母さま、それでいいじゃない。

母 真理子。

娘 私は、別にかまわないのよ。

母 それは、許すってことなんですか？

娘 許す？

母 ええ。

娘 何を？

母 青木さんのしたことですよ。

娘は急に笑い出す。父親と母親は、それを啞然として見つめ
ている。

娘 ハハハハハハ。

なにもかも嘘。

父 嘘？

娘 そうよ。あの人が私を襲ったなんて嘘。

父 いまさら何を言う。それに、本人は認めているじゃないか。

娘 あの人は自分から襲ったつもりになっているかもしれないけど、
本当は私が誘惑したの。

父 誘惑？

娘 あの人にとって、私は禁断の果実。なんといっても、師事して
いる先生の娘なんですから。

その禁断の果実が、ちょっとスカートの丈を短くしたり、ブラウスのボタンを一つ余計に外していたら……

父 馬鹿な。

娘 でも、あの人が、とてもえらかったんですよ。私がそうやって挑発しても、ずっと耐えていたんですもの。そんなことには全然関心がないっていう顔をしていた。なんか、憎たらしかった。

私、あの人の我慢している顔が見たくって、もっと挑発してあげたの。わざと、彼氏の話なんかして。彼氏といっても、実在しない彼氏ですけれども。ハハハ……

でも、だめだった。あの人が、真面目な文学青年のまま。私、だんだん、北風と太陽の話に出てくる北風みたいな心境になっていったんです。なんとか、あの人の欲望に火をつけてやろうって。

母親は、娘の話を聞きたくないといった手で耳をふさぐ。

娘 でも、結局勝つのは太陽の方でしょ。だから私、どうしたら太陽になれるか考えたんです。

それで気がついたの。あの人が耐えることに生きがいを感じているのなら、私も耐える人間になればいいんだって。それで、シスターたちのことを思い出して、その真似をしたの。イエズスさまにすべてを捧げた敬虔な修道女みたいになるまっただの。

父親は、天を仰いでいる。

娘 私だって、それがあの人にあれほどきくななんて思いもしなかった。ロリコンの人っているけど、あの人も……

父 もう止めなさい。

父親の怒りに、娘は一瞬口をつぐむ。

父 どうしてお前は？

娘 私が激しく抵抗したのだから、あの人が余計に興奮して……

父親、椅子から立ち上がり、娘の頬を叩く。娘は、叩かれたのと反対の頬を父親に向かって突き出す。父親はたじろいで、椅子に腰かける。

娘 私、卒業旅行でイタリアに行ったとき、ハンドバックを盗まれたの。腕にかけていたのに、持ち逃げされたんです。

その犯人、とても逃げ足が早かったけれど、角を曲がるとき、私の方を向いてにやりとすると、十字を切ったの。盗みが成功したことを神さまに感謝して。

そのとき、私思ったの。日本では、クリスチャンで品行方正な

堅物みたいに思われているけれど、イタリア人だったら泥棒もクリスチャンなんだって。そうそう、『ゴッドファーザー』なんて、まさにそうでしょ。アメリカに渡ったイタリア系のマフィアの話なんですから。

それで疑問がわいたの。日本のクリスチャンと、イタリアのマフィアと、どちらが本当に神さまを愛しているんだらうかって。お父さまは、どうお思いになる？

父親は、娘の質問に答えない。

娘 ごめんなさい、お父さまをからかったりして。

でも、私、決めているんです。産むことにするって。

父親と母親、驚いて娘を見つめる。

母 だったら、青木さんと……

娘 あの人は関係ないの。私は、あの人の子どもをみごもったわけじゃないんですから。

母 真理子さん、それはどういうことなの。

娘 私を妊娠させたのは、聖霊よ。マリアさまと同じように。

だから産むの。神さまの子どもを……

椅子から立ち上がった娘を啞然とした表情で見つめる父親と母親。

暗転

幕。